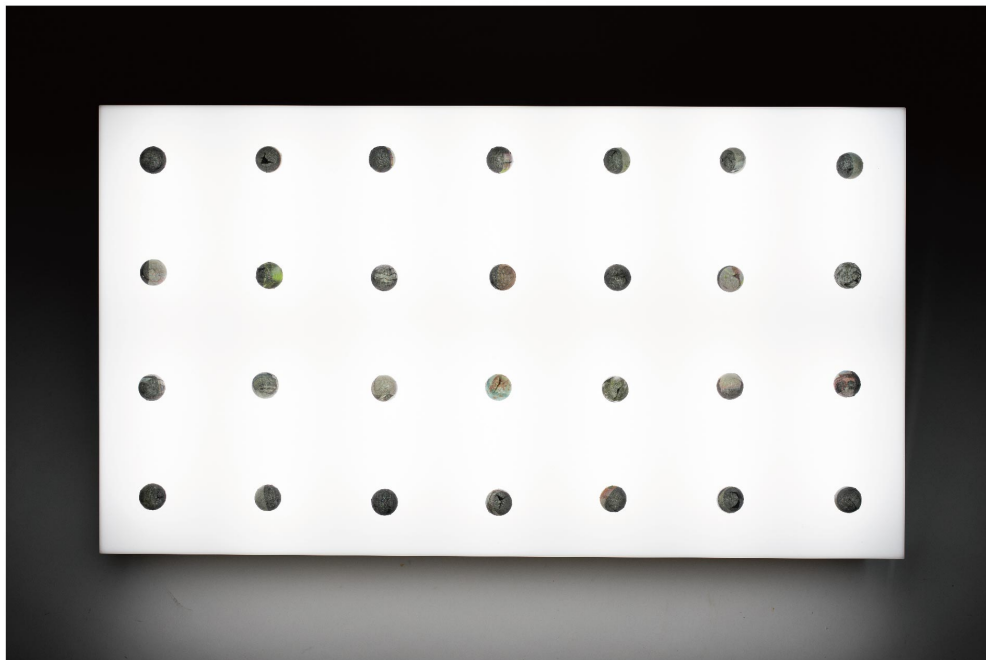
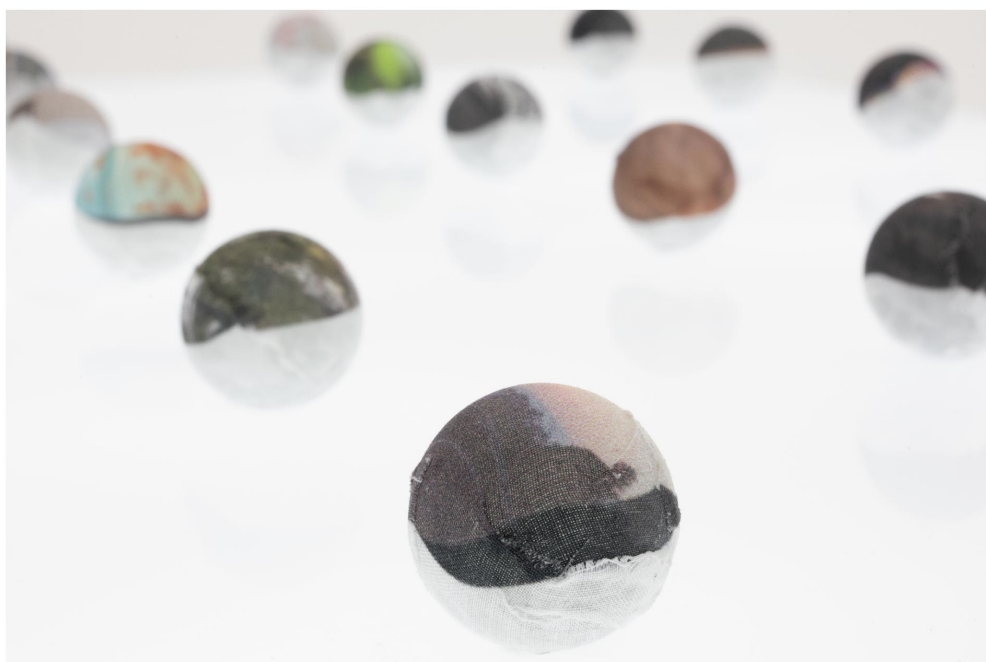


井出 けい菜
IDE Keina



望郷

ガラス、アクリル、LEDライト



望郷 Nostalgia

光や色といった印象のみを抽出して作品化したい。

それは初めて世界に触れたとき目に飛び込んでくる景色のようなものであり、しだいに実体のあるものが抽象化され光で輪郭の薄れた、色だけの印象である。

作中の月は裏側から当てられた光に照らされ、内側からぼんやりと光を放っているように見える。

鮮明に思い出そうとするほど薄れていくような記憶の断片は、誰もが持っている

普遍性を帯びた存在なのではないかを感じる。

そういった情景を表現するために、金属や水の反射特性を活かしながら ガラス、プラスチックといった透過性のある素材と組み合わせて空気に色をつける、光と影で空間を広げていくような彫刻やインスタレーションの制作を試みている。

作品「望郷」で月の満ち欠けに転写された写真のほとんどが個人的な思い出のものだが、これが抽象化されていくにつれ普遍性を帯び、誰もが心の中に持つ風景にリンクするのではないか。そのような鑑賞者一人ひとりの原風景へつづく扉の戸を叩くような作品を作りたいと思った。

私自身が時折訪ねるそんな思想の世界との対峙、それと同じような感覚を作品と鑑賞者の間にも生じさせることが出来ないだろうか

電車内広告としてこの作品の二次元データを展示し、不特定多数の人々の目に触れたことは意義深いことだったと思う。

実際に広告を目にした方々から思い思いの考察が送られてきた。鑑賞者は作品を糸口として原体験の片鱗を自らの中から探し出そうとする旅を体験したからだろう。

私にとってはもう十数年前の一瞬だが、ヴェネツィアの小さな橋の上で人種や年齢を超えたくさんの方が一緒に月を見上げた、あのスローモーションのようなときを忘れられない。

月は寄せては返す波のように、たえず変化を繰り返しながらもいつもそこに在り続ける。

月もまた原風景になり得、月をみて関連する様々な思い出を想起させられる、原風景への入口だ。

その曖昧なシンボルの在り方と、この作品表現の多重層性を重ねた。